



此処彼処

ここ

かしこ

特定非営利活動法人

ふくしま支援・人と文化ネットワーク／広報誌

〒245-0013 横浜市泉区中田東3-16-4 <http://www.support-fukushima.net> Email:p-c-netw311@nifty.com

目次

巻頭／おんぼろ原発＝東海第二の廃炉を！	…1
「チェルノブイリ法日本版」成立への挑戦	…2・3
脱核・脱原発への思い	…4・5
心のリフレッシュ事業報告	…6
老優の怒りに襟を正す	…7
information / 香織のティータイム	…8

おんぼろ

原発Ⅱ東海第二の廃炉を！

事故が起きれば首都圏は壊滅

会員 横田朔子

能汚染は東京圏も例外ではなく、首都機能がマヒする可能性は大きいと言わざるを得ません。

経営破綻状態の会社が原発再稼働？

2018年3月に締結され

た原発との新協定では、5市1村（水戸市・日立市・ひたちなか市・那珂市・常陸太田市・東海村）の、「実質的な事前了解」が必要となりました。茨城県と東海村にしかなかった同意権が、実質的に拡大されたことは再稼働させない運動にとって光明の一つでした。

原発が保有する3基の原発の内、福井県の敦賀1号（廃炉決定）と敦賀2号は直下に

活断層があり、再稼働は無理です。頼れるのは東海第二の1基だけ。しかしながら、原発は安全対策工費を調達できず、テロ対策費の確保も難しいなど、原発を安全に運転する企業体としての資質に欠けており、事実上、経営破綻状態の会社です。

にもかかわらず、5万筆の署名の受け取りを拒否するなどして、なりふりかまわず再稼働を進めようとしています。

東海第二原発の存在は首都圏の人々にとって決して他人事ではありません。「再稼働のための工事は認めない！」「老朽原発の再稼働をさせない！」を基本にすえ、皆さまにもぜひ関心を寄せていただきたいと思います。

老朽・被災の「東海第二原発」再稼働を認めない 原子力規制委員会

日本原子力発電株式会社（原発）の東海第二原発は、東京駅からわずか110kmにある首都圏唯一の原発です。運転開始から40年を迎えたうえ、東日本大震災で被災したおんぼろ原発で、3・11では外部電源を喪失、放射能が大量にばら撒かれる過酷事故寸前でした。以来、8年近く停止のままです。原子炉等規制法により原発の運転期

間は40年と定められており、本来は廃炉になったはずですが、原子力規制委員会は昨年11月「20年運転延長・再稼働」を認可してしまいました。

東海第二原発の半径5km圏内に約8万人、30km圏内に約88万人の人々が住んでいます。もし事故が起きたら、高齢者や要介護の人などへの車の手配は容易ではなく、他県での受け入れ態勢も困難な状況で、避難はほぼ不可能でしょう。さらに事故時の放射

●「此処彼処」15号冒頭記事で「甬守和樹」は「甬守一樹」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

～ 市民立法「チェルノブイリ法日本版」条例への挑戦 ～

NO ではない、YES と もう 1 つのあべこべは可能だ



柳原敏夫さん

柳原 敏夫

(市民が育てる「チェルノブイリ法日本版」の会共同代表・弁護士)

リード

自主避難者の

人の言葉

3・11以来、百戦百敗、ずっと負け続けてきた。では、なぜ負け続けているのか。そのわけは、私たちは3・11で未曾有の経験をしたのに、依然従前の発想しかできず、3・11以後の現実を追いついていないからではないか。

福島原発事故が 明るみにしたもの

それは子どもの命・人権を

守るはずの文科省や医学者が20msv通知や「放射線の影響はニコニコ笑っている人には来ません。クヨクヨしている人に来ます」発言で、「日本最大の児童虐待・最悪のいじめ」の張本人となり、加害責任を負う政府が救済者のつらをして、命の「復興」には口を閉ざし、経済の「復興」に狂騒し、汚染地の被害者は「助けてくれ」という声すらあげられず、経済的「復興」の妨害者として迫害され、密猟者が狩場の番人を、盗人が警察官を演じる狂気が正気の振りをして、正気が狂気扱いされている。

3・11ショックのどさくさ

紛れの中で、「すべてがあべこべ」の「見えない廃墟」の世界が出現したことにある。

本当の問題

それはその先に、そして私たちの側にある。私たちはこの悪夢の出来事を前に「うそー」「夢でしょ」と今なお茫然自失のショック状態の中にいる。そのため、この現実と対決できず、引きこもり、オリンピックのお祭り騒ぎの現実逃避の中にいる。

しかし子どもの命を守るためには、この現実逃避から抜け出すしかない。そのためには、「あべこべの世界」はなぜもたらされたのか問う必要がある。

ナオミ・クラインの「ショック・ドクトリン」

それは「あべこべの世界」を解くメガネだと思おう。「ショック・ドクトリン」の原理は「危機のみが真の変革をもたらす」、ひとたび危機が発

生し、人々が茫然自失の間に
一気呵成に「変革」を強行す
ることが肝心、この間に断固
とした行動を取る機会を逸す
れば、変革のチャンスは二度
とやってこないと肝に銘じて
いる。

だから、原発事故直後のど
さくさ紛れに、福島県のみ学
校安全基準20倍引き上げの強
行、ミスター1000msvの
異名を持つ山下俊一発言と、
彼の設計による欺瞞的な福島
県民健康調査、被害者の救済
を原発周辺の住民だけに限定
し、それ以外には徹底した自
己責任（新自由主義）の押し
付け、他方で、秘密保護法の

成立、集団的自衛権の行使容
認の閣議決定、安保関連法の
成立、共謀罪の成立と戦争に
突き進む、憲法違反を承知で
強引な政治改革の実現——そ
れは3・11前には考えられな
かった、火事場泥棒の法的
クレータと呼ぶほかない異常
事態。

3・11以後の日本は国中が
原発事故に翻弄された国難な
どではなくて、「ピンチはチャ
ンス」の通り、原発事故とい
う危機を、ここぞとばかりに
私たちが茫然自失のショック
状態の間に、一気呵成に、原
発事故前には不可能だった政
治改悪を実現した千載一遇の

チャンスだった。これは「福
島の犯罪」と呼ぶのが相応し
い。

3・11以後の私たちに
残されていることが
あるとしたら——

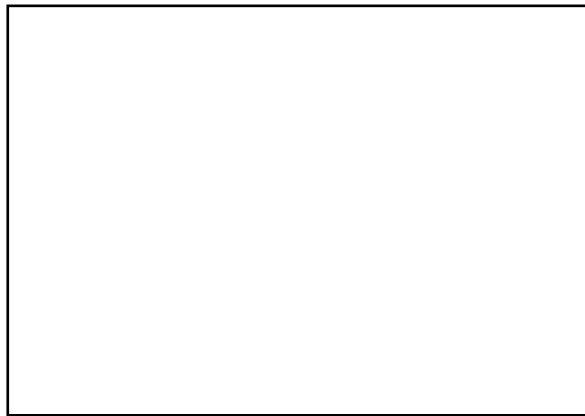
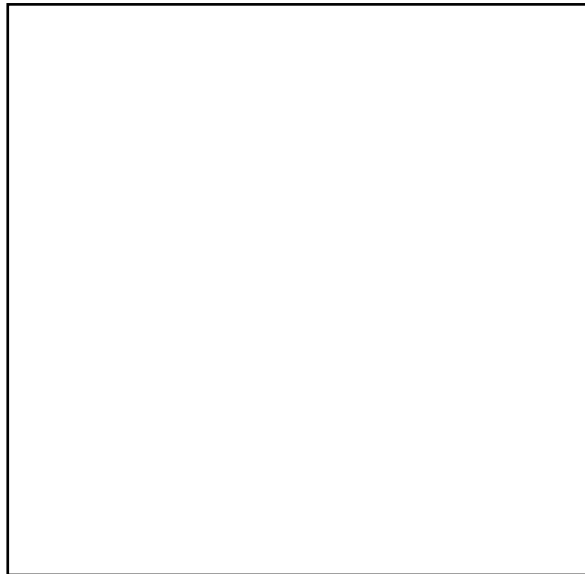
それは単にNO（「再稼動
反対」「支援を打ち切るな」
と言っただけではない、「福島
の犯罪」をただし、積極的に
YESを言う必要が、放射能
の危険にさらされた命の救済
を具体化する必要がある。
その最初の一步が、原子力
災害から私たちの命・健康・

暮らしを守る世界最初の人権
宣言である旧ソ連のチエルノ
ブイリ法、その日本版を制定
することである。

だが、日本社会が持つ最悪
の要素のすべてが露呈した
3・11以後の「すべてがあべ
こべ」の暗黒時代に、それは
可能だろうか。可能である。
なぜなら、3・11以後に出現
した「あべこべ」は生半可で
なく、悪のあべこべだけでな
く、政治を一握りの職業的専
門家に任せる「お任せ民主主
義」から、アマチュアの市民
が自ら統治する市民主導の参
加型民主主義に交代する「も
う一つのあべこべ」をも生み

出したから。それが市民立法
の可能性である。

実は私たちには公式の日本
史に載らない、栄光の「市民
立法」の遺産がある。この「希
望の扉」のすべてを叩き、開
いて、市民立法「チエルノブ
イリ法日本版」を実現し、あ
べこべをたたく——それが3・
11以後の私たちに残されてい
ることである。
(2019.2.7)



脱核・脱原発へーおじさんの個人的な思いー

そつたら、 日本人には なりたくね

NPO会員 佐野一裕

巨大防波堤に

100年後も使用可能だという保証はない

瀬戸内海を望む町に生まれ、東京で育ち、そのまま大学へ、卒業後も東京で10数年間仕事をしていたが、東北・福島とは縁がなく、東京の電気が福島に依存していたことも知らなかった。しかし、東日本大震災・福島原発事故をきっかけに、脱核・脱原発の思いの中で国会や東電の前で声を上げ、個人としてできる行動を継続するようになった。

2015年6月には三陸の町を巡る約900kmのバス旅をした。そこで見たものは、防波堤の工事、津波で浸水した土地の嵩上げ工事だった。巨大な防波堤は津波の軽減と時間稼ぎには役に立つかもしれないが、コンクリートの寿命は約60年。1000年に一度の大津波どころか、100年先の津波にも耐えられるのか疑問だ。

2100年には人口は今の約半分6400万人という予測もある。人口減少への対応策もなく、新たな国家社会システムの構築もされないままなら、税金の減少、財政悪化の中で、防波堤や道路が補修さ

福島の真実に触れるツアーに参加 人々の貴重な話に心打たれる

れ、100年後も使用可能な保証などないのだ。陸前高田のボランティアガイドは、地盤の嵩上げのための数百億の投資は本当に住民のためになるのか、結局はゼネコンのためではないかと語っていた。

「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」のを知ったのは2015年5月の憲法9条の集会でのことだ。同年5月31日の総会イベント、猪狩弘之氏の講演会に参加し、縁あってこのNPOの会員となった。9月にはNPOが主催する福島ツアーに初めて参加した。

喜多方市の太陽光発電所を見学、奥会津書房の遠藤由美子さんの貴重な話を聞くこと

ができた。郡山市では放射能ゴミ仮焼却炉の実態についてレクチャーを受けた。2016年10月のツアーでは、放射線検査施設からさらに一步先の診療所を目指す、NPO「放射線測定室たちね」の姿勢に打たれた。また、飯館村ではフレコンバックの野積み、山、酪農家長谷川健一氏の苦渋と怒り、「ふくしま再生の会」田尾陽一会長の冷静・明晰な分析と農業再生に

かける情熱や地道な取り組みを肌で感じた。

2017年11月の3回目のツアーでは、三春で原発告訴団団長の武藤類子さんの静かなる怒りのレクチャー、福島の常円寺・阿部光裕住職の地域に根差した活動に触れた。再びの飯館村では箱物はできたものの、帰還の進まない実態を、浪江町の「希望の牧場」では原発事故は人間だけでなく全ての生き物を壊していく姿などをまじかに見た。

これらの福島ツアーのほか、

蟻塚亮二氏、西尾正道氏などの講演会、先日の中村敦夫氏の朗読劇などにも参加してきた。

西尾氏の『放射線健康障害の真実』によれば、今回の原発事故では遠くグアム島でもウラン234、235、238そしてプルトニウム239が観測史上初めて検出されているという。今後も原発を稼働させれば、これらの核物質がますます増えると同時に、廃炉した原子炉を含む構造物そのものも高度に汚染された廃

棄物でしかなくなる現実が待っている。

思えば、高レベル放射性廃棄物を人類の歴史をはるかに超えた期間の間、4つのプルトの端にある地震列島の日本に安全に保管できる場所など、はたしてあるのだろうか。最終処分場どころか、どこにも捨てる場はないのが現実であり、原発は未来の子孫人類に対する許されない犯罪以外の何物でもない。

今は「災害後」ではなく「災間」にすぎない。
あきらめずに闘う

今年で福島の事故から8年、チェルノブイリから33年経つが、今の状況は「災害後」ではなく、地震列島の日本においては災害と災害の間、つまり「災間」でしかない。復興と名のつく膨大な土木工事と自然破壊、そして、今また帰還の強制、まったく収束の見えない汚染水問題、そして被ばく健康問題があるなかで、原発

再稼働などとはとうてい正気の沙汰とは思えない。それに加えて、「憲法改正」、「もりかけ」から最近の「厚労省の統計不正問題」等々、政府・官庁の問題が噴出ししている。東京オリンピックや大阪万博など、マスメディアの華々しくも空虚な言葉があふれる時代、たとえ無言の国民がマジョリティーであったとしても(そ



うではないと思いたいが、まさに中村敦夫さんに倣い「そつたら日本人にはなりたくねー」と私は言い続けたい。あの震災と原発事故を忘れないこと、その危険性を訴え続けること、政府の発言や行動に騙されないこと、そしてあきらめないことが、今に生きる我々の役割ではないかと思っ日々である。

まあだだよ

薄井 清美

昔から父はさつさと支度をして外で母を待っていた

靴を磨いて、化粧してトイレに行って

そして最後に戸締まり男は何もしないから気楽なもんよ

誕生日の翌日

夕べのすき焼きの残りで朝食を終え父はいつもの散歩へ出た

それっきり

突然のことだったが父らしい

通夜

納棺師がやってきた

笹舟が小川を流れてゆくような

静かな音楽を聞きながら

父は旅立ちの衣装に包まれた

お父さんお腹がへこんで

スマートになったね

いい男になった

あの世でいい人見つけなよ

お父さんはせっかちすぎるの

女はいろいろやることがあるわ



民謡で踊って、手拍子 心のリフレッシュ



子どもたちの心のリフレッシュ事業報告

理事 郡司真弓

- *実施日：2018年11月12日～13日
- *訪問先：12日（月）いわき市神谷こども園（120人）、郷ヶ丘幼稚園（100人）
13日（火）工房・阿列布（こうぼう・おりいぶ）（100人）
- *公演者：若狭さちさん、上領亘さん



秋晴れの2日間、子どもの心のリフレッシュ事業として、いわき市の保育園2カ所と自立支援施設1カ所を回りました。今回の「文化」は「民謡」です。

会津出身、いわき市の福島高専卒業の若狭さちさんは、中学時代に民謡コンテストで全国一になった腕前を持つ若狭女性です。現在は、民謡に親しんでもらうために、現代風にアレンジしてライブなどで活躍をしています。

今回、若狭さんの民謡を通して、幼い子どもたちのリフレッシュを図ろうと計画しましたが、果たして子どもたちはどのように民謡に反応するのか不安がありました。しかし、若狭さんの歌声とテンポの早い民謡、そして上領さん

による太鼓や三味線の迫力ある演奏は、子どもたちの心に響き、一緒に手拍子をし、合の手を歌い、踊る姿は笑顔がいっぱいでした。

三味線を初めて見る子どもたちに若狭さんは「これは何かな？」と聞きます。すると子どもたちは「ギター」「バイオリン」などの答えが返ってきます。日本の伝統的な楽器を見る機会がないので、子どもたちはその音色に興味津々！ 懸念していた不安も吹き飛び、子どもたちは柔軟な心をもっていることを実感しました。

郷ヶ丘幼稚園の開放的な会場では、輪になって即席盆踊り大会です。「もつとやつて〜」という声に促され、幼い子から年長まで、一つになって何度も踊りました。

「工房・阿列布（おりいぶ）」は、秋祭りのイベントに組み入れたため、紅白の幕に若狭さんの横断幕、そして、マグロの解体もあり、利用者さんだけでなく親御さん、支援者や地域、行政の方々が集まり、

ちょっとしたミニライブになりました。

工房・阿列布は、知的なハンディを持つ18歳以上の人たちの日常生活上の自立と成長のための施設で、現在40数人が通所しています。

若狭さんが登場すると「うわあ〜きれいだ！」の声と共に、室内にどよめきが起りました。手には若狭さちさんを応援する「若狭さちうちわ」が振られていました。昨日、皆で作ったこのことです。

歌の合間の掛け声も「がんばれよう！」「かわい〜」など、思い思いの言葉をかけていました。自然と「アンコール」の声がかかり、若狭さんは「オーシャンゼリゼ」をみんなが楽しく歌いました。

「文化」は年齢に関係なく心に響き渡り、対話をする事ができるツールであると実感しました。福島の復興は目に見える形では進んでいるようですが、心の回復は人さまざまです。子どものころから多様な文化にふれて豊かな心を培ってくれることを願い、今後もリフレッシュ事業を大切に実施していきたいと思えます。

● 中村敦夫 『線量計が鳴る』 東京・王子公演

老優の怒りに襟を正す

会員 須田 忠博

2019年1月19日、当NPOが主催した俳優中村敦夫の朗読劇『線量計が鳴る』公演。170人余りの観客が東京・王子「北とびあ」に集まりました。NPO会員の須田忠博さんから寄せられた公演の感想です。



東日本大震災後、私たちは否も応もなく原発問題と向き合わざるを得なくなった。そして、原発について呆れるほど無知であり、問い直すべき視点がいかに多いかを感じ知った。私を始め、大半の日本人がそうだったのではないだろうか。

しかし、月日が経ち、福島原発の引き起こした災禍に対する誠実な対応と反省のないまま、停止原発の再稼働が始まっている。原発の脅威と原発推進の闇が衝撃的に受け止められた空気は薄まり、消えようとしている。

ならぬものはならぬ

1月19日、中村敦夫さんの朗読劇『線量計が鳴る』——元・原発技師のモノローグ』を観させていただいた。反骨の老優は心底から怒っていた。忘れてはならない。ならぬものはならぬ。原発はならぬ——と。背筋をピンと伸ばし、79歳とは思えぬ声量で原発問題を解きほぐし、語っていく一人劇だった。

語られる内容は、原発問題を捉える上での視点を網羅した格好のガイドと言つべきも

の。一つひとつを細かくは解説しない。本筋をバサリと斬って捨てる。その爽快さ、痛快さに満場の拍手が幾度となく湧き起った。

同じ内容を講演形式で行ったとしたら、おそらくこつも引き込まれはしないだろう。台本を練り直しながら演出の完成度を高めてきたに違いない。劇仕立てであることが、講演形式を超えた説得力につながっている。そこに、演じる熱さとセンスのいい話術が加わっているため、観客は身を乗り出して聞き入ることになる。

公憤と義憤

中村さんはカーテンコールで「公憤と義憤で続けている」と語った。「公憤」は社会の悪に対する憤り。「義憤」は道義に外れたことに対する憤り、といったところか。いずれであれ、憤りを活力源にして訴え続けているのだろう。

そんな中村さんの告発劇に、このところ忘れていた清々しさを感じるとともに、襟を正したくなった。

定期総会&学習会のお知らせ

2018年度の活動報告と2019年度の活動計画・予算を決定する総会と学習会を致します。本誌の2～3ページに寄稿いただいた柳原敏夫弁護士による学習会です。是非、ご参加ください。

- 日時 2019年5月19日(日)
 総会：13時～14時30分
 学習会：14時45分～16時
 講師：柳原敏夫弁護士
- テーマ 市民が作る～チェルノブイリ法 日本版～
- 会場：本郷文化フォーラム
 東京都文京区本郷3-29-10
 飯島ビル1階 TEL：03-3818-6671

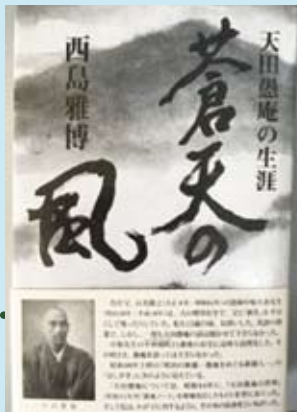
寄付のお願い

私たちは、多くの人たちの会費と寄付で事業を運営しています。東日本大震災と原発事故から7年を迎えるようになり、人々の関心も薄くなってきました。しかし、支援を必要としている人や子どもはたくさんいます。次年度も活動を継続していくために、ご寄付をよろしくお祈りします。

会費・寄付金の振り込み

<振込先>

- 銀行振込 / 三菱東京UFJ銀行たまプラーザ支店
 (店番号) 629 (口座番号) 0297422
 振込先名：特定非営利活動法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク
- 郵便振替 / 口座番号：00260-7-108912
 名義：ふくしま支援・人と文化ネットワーク



蒼天の風

皆様は天田愚庵という明治時代中期に活躍した歌人をご存知でしょうか？
 天田愚庵こと天田五郎は磐城平藩で勤定奉行を務め

神田香織のティータイム



た甘田平太夫の二男で戊辰戦争の時、若干一五歳で参戦。この戦争で父母と妹が行く方知れずとなってしまい、以後、一生をかけた五郎の肉親探しの旅が始まるのです。

◆それが波乱万丈。一昨年上梓され西島雅博氏の「天田愚庵の生涯、蒼天の風」が実に面白いのです。18歳で上京し、山岡鉄舟の知遇を得て清水の次郎長を紹介

されます。次郎長のところなら色んな人が立ち寄るから、五郎の両親の行方もつかめるかもしれないと鉄舟は考えたのでした。

富士の裾野の開墾事業に取り組んでいた次郎長。五郎に手伝わせてみると、率先して力仕事もやるし、人

を束ねるのもうまい。次郎長は五郎を気に入る、五郎もまた、次郎長の魅力に惹かれます。

◆そして本人に直接、昔話を聞くほかに、健在だった古い子分たちからも話を聞いてまとめたのが『東海遊侠伝』。「神田のうまれだつて？ 寿司食いね〜」の浪曲でおなじみです。

◆五郎はその後、大阪で新聞記者になります。それも両親と妹の行方を探すためでした。のちに、仏門に入りますが、歌人としても著名で、正岡子規は愚庵の影響を受け和歌の革新運動に努めることになるのです。彼の足跡を辿ると、明治以降の政治や庶民の生活が見えて来て、今の政治や官僚たちの体たらくも納得(笑)。「蒼天の風」、ぜひお薦めします。